

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 24 年 5 月 25 日現在

機関番号：32606

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2011

課題番号：22720021

研究課題名（和文）明代東アジアにおける文化交渉 『小学』『孝経』『家礼』の観点から

研究課題名（英文）A Cultural Interaction of East Asia at Ming dynasty-from the standpoint of the book of Little Learning(XIAO XUE),Filial piety(XIAO JING)and domestic ritual(JIA LI)

研究代表者：白井 順（SHIRAI JUN）

学習院大学・東洋文化研究所・客員研究員

研究者番号：20534689

研究成果の概要（和文）：

『小学句読』、『小学集説』、『小学章句』などの『小学』テキストの系統を整理し、朱熹が『大学』に対置して、全く新しい思想書としての『小学』を編んだのだ、という視点を提示した。また、呂維祺（明）、鄭斉斗（李朝）、蟹養齋（江戸）という三人の事例を通して、朱子学と陽明学との「間」に介在する思想について考察を加えた。

研究成果の概要（英文）：

I sorted out the chain of Xiao xue's text, that is *Xiao xue ju du*(小学句読), *Xiao xue ji shuo* (小学集説), *Xiao xue zhang ju*(小学章句), after, I proposed an idea that Zhu Xi compiled a quite new thought text Xiao xue against *Great Learning* (大学). In addition, through studying examples of Lu WeiQi(呂維祺), Chung Che Du(), *Kani Yousai*(蟹養齋), I considered the thought between Zhu Xi's School and Wan Yang ming's School.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・中国哲学

キーワード：小学・朱子学・陽明学・陳選・小学集説・鄭斉斗・蟹養齋・呂維祺

1. 研究開始当初の背景

従来、明代思想史研究は陽明学一辺倒で、とりわけ、陽明後学をはじめ陽明学成立後の思想を扱ったものが多い。また中国・朝鮮・日本の各地域の思想家を個別的に論じることはあっても、明代東アジア全体を朱子学の観点から捉えるという視点は、科挙で朱子学が基準となっていることが自明の事実とし

て大前提とされているが故に、ほとんど取組まれることはない。かなり前の研究であるが、阿部吉雄『日本朱子学と朝鮮』（1965年、東大出版会）が、山崎闇斎や李退溪といった特徴的な思想家を基軸に中国の朱子学が日本・朝鮮で如何に展開したのかという視点を提示した好著である。

私はかねてから書物がどのように読まれ

たか、書物の受容の様相に関心を持っている。従来、書物の流通・伝播といった問題は、書誌学として研究され、思想と関連付けて研究されることは、特に『小学』・『孝経』・『家礼』に関していえば殆どなかったといつてよい。

明初には、『性理大全』をはじめ、『大学衍義補』・『小学句読』・『朱子家礼儀節』といった朱子学の正統的注釈書文献が成立する。これらは、朱熹が本来編纂した『小学』・『朱子家礼』などを、200年以上経った明初には注釈書無しでは理解不可能であった事実を暗に示している。明初に朱熹の真意は何か、あるいは『小学』・『朱子家礼』が朱子学的にどのような意味があるのかと思索しており、現在我々が『小学』や『家礼』を子供のための訓蒙書や礼儀作法のマニュアルと考えているのとは、全く異なる。ゆえに、これらの書物を思想書として再考察し、東アジア全体のなかでどのような差異があるのかを検証して、朱子学から陽明学へとという明代東アジア思想世界の一端を浮かび上がらせられるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

14世紀～17世紀、中国王朝でいえば、明代は中国を基軸に、朝鮮半島・日本・琉球などの東アジア地域全体で文化交流が活発に行われた時期であるが、中国明代において発信された朱子学がこの東アジア地域でどのように受容され展開していったか、それを書物の伝播と流通を通じて探るのが私の研究目的である。本研究では、明代に日常の基礎的教養書として読まれた『小学』・『孝経』・『家礼』などが、朝鮮・日本でどのように受容されたのかというテーマに焦点を絞って検討を加える。

『小学』や『家礼』に詳細な注を附さねば理解できないと考えられた明初から明末に到るまでの間、思想も朱子学から陽明学が生まれ、大きな変化があった。そのなかで、『小学』や『家礼』はどのように捉えられたのかを、実際の姿から考察することを試みる。

3. 研究の方法

明初に、何士信・陳祚・呉訥・陳選らの手による何種もの『小学』の解釈書がつくられているが、このことは当時の人々が『小学』を解説なしでは理解できなかった事実を物語っている。まず、これらのテキストがどのような関係にあるのかを書誌的に整理する。そしてその基礎に立って、思想や受容の様相の差異を検討する。

思想的アプローチとして、これら理学書が日常生活の中でどのように使われたのかという実際の姿を抉り出すことを重点において考察する。その際、朱子学・陽明学という二つの要素を兼ね備える事例を取り上げる。

4. 研究成果

まず、『小学』のテキスト研究とその影響を書誌的に整理した。この内容については、2010年11月6日第60回東方学会にて口頭発表した。また2012年12月発行予定の韓国の学術雑誌『東洋社会思想研究』に掲載する予定である。

(1) 『小学』について

一般に『小学』は、日常の所作や規範が書かれている子供のための教育書として、日本・中国・韓国において教育史の題材として研究されてきたが、朱熹が編集した本書は元来思想書なのである。朱熹は、日常生活での所作ではなく、所作をするときの心の修養を説いたものが古の『小学』であると考えていた。古の『小学』はすでに亡んだが、それを復元するのではなく、天下国家を論じる『大学』に對置して新しい『小学』を朱熹は作り上げたのである。朱熹は自らその新しい『小学』に注を附し、古の『小学』を学ぶ機会を失った門人達に読ませた。

(2) 明代の注釈書『小学句読』・『小学集説』・『小学章句』の系統

明代の『小学』註釋書には大別して三つの流れがある。一つ目は何士信『小学集成』で、これは陳選『小学句読』へと繋がる。二つ目は、程愈『小学集説』と王雲鳳『小学章句』で、前者は朝鮮で重視され、後者は日本で重視されたが、両書とも中国では読者を得なかった。三つ目は、前述の陳選『小学句読』を踏まえて作成された註釋書である。これは、明末に『小学』を郷学で教えるようにとの聖諭が出されたあと、朱熹の本意を述べたものとして編まれた。『小学』の思想研究を進める上で、近世東アジアにはこの三つの流れが絡まり合っていることを明らかにした。

(3) 思想的展開と文化交流

『小学』が東アジア世界に広く流布してゆくに伴って、『小学』は子供の教育書であるという誤解が生じはじめた。朱子学の原点＝原典に歸ろうとした山崎闇斎派の蟹養齋は、陳選『小学句読』が朱熹の本意を分からなくさせていると考え、「句読辨」を著した。一方、徂徠派の太宰春臺は『非小学辨』において、「古の小学の学たる所以を分かっていない朱熹が『小学』を作ったために後世の人を誤らせた」と批判した。これに對し室鳩巢の門人・河川静齋は反駁文を書き、「此の誤り、吾が党の諸儒も多く免れざるものなり」と述べ、太宰批判に借口して当時の朱子学者の認識を衝いている。

日本朱子学に大きな影響を与えたと言われる朝鮮の李退溪『聖学十圖』中の第三「小学圖」は、『小学集成』を踏まえて作成されたものであるが、これは和刻の『小学句読』にも掲げられ、中・韓・日の一種のコラボレ

ーションになっている。また、日本では『小学』の内篇を重視し理念を受容したが、朝鮮では実践すべき規範としても受容され、その観点から『小学』の續編というべき『海東續小学』が編まれた(「海東」は朝鮮のこと)。このように、『小学』は時代や地域で受容の様相が異なっているにも関わらず、基礎的な書誌研究がなおざりにされてきた。このように、書誌的研究の上に立った思想書『小学』研究の可能性を求めて、近世東アジアにおける『小学』注釋書の全体圖を整理してみた。

また思想的アプローチの事例として、(1)中国の呂維祺、(2)日本の蟹養齋、(3)朝鮮の鄭齊斗三人の実際に行った学問を取り上げた。これら三人はこれまで殆ど注目されてこなかった。これら三人は朱子学・陽明学双方の要素を持つ思想家である。

(1) 呂維祺

呂維祺は『孝経』を信奉し、『家礼』を実践しようとした東林党の重要な人物である。彼が息子のために行った冠礼の記録(儀註)を分析した。これは民間で実際に行ったりアルタイムな記録として、大きな意味があるが、これまで誰もこの資料については言及してこなかった。この呂維祺の『家礼』に関する論文は、韓国・国学振興院で開催された国際シンポジウム「『朱子家礼』と東アジアの文化交渉」にて発表し、吾妻重二・朴元在共編『朱子家礼と東アジアの文化交渉』(汲古書院、2012年)に採録された。

(2) 蟹養齋

蟹養齋は、山崎闇齋派で『小学』の重要性を主張した人物である。闇齋派が朱子学を信奉したことは云うまでもないが、服装も文化も異なる日本で、どのように『小学』を実践するのかという疑問があった。

蟹が自らの講学の方法を規定し、教学方法について思想的な意味があると考えていたことを示す資料を私は見つけた。また蟹は藩に仕える者たちに、「小笠原家・武田家・伊勢家は往古より武家の礼式を伝える家なり」と日本古来の礼に随うことを述べ、精神的には「敬」に依拠せよと説いた。朱子学では、礼のきまり一つ一つにそうあるべく理があると考えてるので、本来的な朱子学から言えば、日本古来の武家礼式に随うことは勿論ありえない。しかも心に依拠するとなれば、陽明学に近似するのであるが、蟹はあくまでも「朱子学」だと説く。闇齋派は、『朱子家礼』や『小学』を読んだり、勉強会をしたりするだけでなく、実際に実践することに意義を見出しているが故に、却って心に依拠するようになることを指摘した。

(3) 鄭齊斗

鄭齊斗は、朝鮮で初めて本格的に陽明学を提唱した人物として知られるが、彼の周辺をみることによってこれまで指摘されてこな

かった新事実を発見した。新知見の一つ目として、鄭齊斗の文集は、尹拯(1629-1714)の学問を信奉する沈鎔と李震炳によって編纂されたものであり、鄭齊斗自身も一時的ではあるが尹拯に学んでいる。故に、文集編纂の際に、沈鎔・李震炳が陽明学的記述を排除した形跡がある。二つ目として、鄭齊斗の叔父の李星齡は宋時烈と関係を持ち、野史に長け、養生思想の持ち主であった。鄭齊斗の周辺に朱子学や老論・少論鬪争以外の思想世界があったことが窺え、これらの土壌が鄭齊斗の思想に何らかの影響を及ぼしたことは否定できない。

宋時烈は朱子学そのものを追及し、尹拯と対立するが、尹拯は李滉以来の朝鮮性理学の実践を追及した人物である。彼が魯岡書院で門人たちに学習させた礼学の修養論は、中国的な朱子学とは異なる朝鮮儒学によって育まれた学問であった。このように明代末期の陽明学の影響のみならず、朝鮮儒学そのものに大きな問題があったことを指摘した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

白井順、明末・河南における『朱子家礼』の現場 - 呂維祺の冠礼を中心に、国学研究、査読無、16巻、2010、p346-368

白井順、蟹養齋の講学 九州大学碩水文庫を主たる資料に仰いで、哲学年報、査読無、70号、2011、p167-203

白井順、沈鎔と李震炳と李星齡 鄭齊斗の周辺、査読有、30号、2011、p329-347

〔学会発表〕(計3件)

白井順、沈鎔と李震炳と李星齡 鄭齊斗の周辺、2011年10月15日、第八回江華陽明学国際学術大会

白井順、『小学再考』その思想研究の可能性を求めて、2010年11月6日、第60回東方学会

白井順、蟹養齋の講学、2010年7月11日、第136回中哲懇話会

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：
〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

白井 順 (SHIRAI JUN)

学習院大学・東洋文化研究所・客員研究

員

研究者番号：20534689